『シンデレラ』についての豆知識

『シンデレラ』は、フランスのアカデミー会員であったシャルル・ペロー(Charles Perrault, 1628-1703)が、伝承の形で伝わっていた幾つかの物語を、一冊にまとめて出版した本にその起源をもちます。それは一般には『ペロー童話集』(1697)と呼ばれていますが、『赤頭巾ちゃん』、『眠れる森の美女』、『長靴をはいた猫』など現在でも世界中で親しまれている作品がおさめられており、なかでも『シンデレラ』は英国において特に人気を博することになります。フランス語では『サンドリヨン』と言います。後年にドイツで出版された『グリム童話集』(1812（第一巻)、1815（第二巻）)と相まって『シンデレラ』は誰もが知る物語となります。グリム兄弟の『灰かぶり姫（＝シンデレラ)』と『ペロー童話集』の『シンデレラ』は似ていますが違いがあります。(もともと、「継子いじめ」の物語の伝承は世界中に点在しており、一番古いものは中国にあるそうです。日本にも『鉢かづき』という御伽草子の物語が伝わっています。）特に結末には大きな違いがあります。『灰かぶり姫』の二人の姉たちは無理矢理に自分の足を靴に入れようとして、爪先を切ったり、かかとを切ったりします。さらに、鳥に目をつつかれてしまいます。一方、『ペロー童話集』では、二人の姉たちはシンデレラと仲直りをしてシンデレラと同様にめでたく結婚をするというハッピー・エンディングの結末となっています。今回の展覧の『シンデレラ』のチャップブックは、『ペロー童話集』の流れをくむものですからまったく怖い話は出てきません。どうぞご安心ください。

英国のロンドンで、1729 年に初めてロバート・サンバー(Robert Samber, *bap.* 1682 ・ *c.* 1745)という人物が『ペロー童話集』を英語に翻訳しました（展示リストの 1 番がそれに当たります)。もちろんその本はチャップブックではなく、立派な書籍ですが、それをもとにして安価な価格の『シンデレラ』のチャップブックが出版されるようになっていきます。もともとチャップブックという本は大人が読む内容のものがほとんどでしたが、時代の経過とともにその内容も変化していきます。ちょうどその変化に合わせるように絶妙のタイミングで『シンデレラ』が登場することになります。『シンデレラ』の読者の対象は子供が中心となり、はじめは物語に含まれる教訓を教え込むような「教化」、「教育」を目的としたものでしたが、そこに娯楽としての読書の楽しみという概念が入ってきます。(先述の『ペロー童話集』(1697)の物語やロバート・サンバーが訳した『昔話』(1729)にはそのすべての作品に、つまり『シンデレラ』にも本編の物語のあとに「教訓（＝モラル)」が付随しています。いわば作品は、「昔話」と「教訓」のペアーがセットとなって成立しているわけです。）ですが、『シンデレラ』のチャップブックにはそのペアーのセットの形式が採られているものはありません。「教訓」が置かれて堅苦しいものになるのではなく、本文の中に「教訓」を織り込んだものとなっています。いつでもどこでも同じなのでしょうね、子供にとって、否、大人にとっても読書は読んで楽しいものでなくてはなりませんから、自然な形で「教訓」が消えてしまったのであろうと思われます。確かに、『シンデレラ』は単に楽しんで読むこともできますが（それでいいと思います)、内包されるメッセージをどこかで感じて、教訓的な何かを学ぶこともできるかもしれません。いかようにも読まれることになりますが、『シンデレラ』の物語は「魔法」という不思議な世界も加わっていますから、すっかり世界中の人々の心をとりこにしてしまったのであろうと思います。それこそ「真夜中までに」という時間の制限のない魔法にかかったかのようです。

歯学部　人文科学研究室
准教授　木村　利夫